

他者とのかかわりを考える情報モラルの授業

情報教育研修課 長期研修員 宇田 信一

1 主題設定の理由

2008年1月の中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」では、道徳教育を通じて「自分を律しつつ、他者と共に協調し、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性をはぐくむこと」が大切であると、他者とのかかわりの重要性について触れている。

情報化社会では、コンピュータやインターネット(以下、ネットとする)等を用いれば、いつでも、どこからでも他者とコミュニケーションを取ることができる。しかし、情報の扱い方に対する認識が甘かったり、他者への配慮を欠いたりすると、トラブルを引き起こすおそれがある。そのような現状を踏まえ、2008年3月告示の新学習指導要領では、子どもたちが情報モラルを身に付ける必要性をうたっている。

所属する中学校では、生徒がネット上で他者との関係をこじらせたり、関係を更に悪化させたりして、トラブルや問題行動に発展するという事例が多くあった。また、トラブルや問題行動に対する指導のほとんどが対症療法的なものであり、時として、十分な指導がなされないこともあった。

そこで、情報モラルの指導内容を他者の気持ちや他者への影響を考えたかかわりに絞り、トラブルや問題行動が発生する前に、系統的に指導することが必要であると考えた。さらに、教員からの一方的な指導ではなく、どのような在り方で情報のやりとりをしたらよいのかを、生徒が主体的に考え、仲間と真剣に話し合う場を設定する必要があるととらえた。また、話合いを充実させることによって、生徒は情報モラルの問題を自分自身のこと、身近なこととしてとらえることができると考えた。そして、そのような話合いは互いのかかわり合いを日常的に学んでいる学級の仲間との中で行われるべきだと考え、学級における情報モラルの授業(以下、情報モラル授業とする)に焦点を当て、本主題を設定した。

2 研究の仮説

中学校において、他者とのかかわりを考える情報モラル授業を実践することにより、生徒が他者とのかかわりについて真剣に考え、より良い人間関係を構築しようとする。

3 研究の方法

- (1) 他者とのかかわりについて考察する。
- (2) 情報モラルについて生徒及び教員対象の実態調査を行い、問題点を明らかにする。
- (3) 他者とのかかわりを考える情報モラル授業の取組計画を作成する。
- (4) 他者とのかかわりを考える情報モラル授業を構想・実践する。
- (5) 生徒及び教員の意識の変容から他者とのかかわりを考える情報モラル授業の有効性を考察する。

4 研究の内容

(1) 他者とのかかわりについての考察

ア セルマンが考える他者とのかかわり

アメリカの心理学者セルマンは、他者とのかかわりにおいて、相手の立場や気持ちを考えて、適切に行動できる心の在り方の重要性を述べている。セルマンによれば、その心の在り方こそが思いやりの心であり、それを「役割取得能力」と名付けている。そして、「役割取得能力」は「自分と他者の違いを認識すること」、「他者の感情や思考などの心の内側を推測すること」、「それに基づいて自分の役割を行動決定すること」の三つの力によって支えられているとしている。

また、セルマンは、「役割取得能力」の発達段階が幼児期から青年期までを通して5段階であると示している（資料1）。本研究の対象となる中学生は、年齢上はレベル3とレベル4の区分に属するが、レベル3が中心であるととらえる。レベル3は、第三者の視点から自分と他者の心の内側（感情や思考）を推測でき、客観性を伴った視点で物事を見ることができるとされている。

【資料1】セルマンの考える「役割取得能力の発達段階」

レベル0	自己中心的役割取得（3～5歳） 自分と他者の視点を区別することが難しい。
レベル1	主観的役割取得（6～7歳） 自分と他者の視点を区別して理解するが、同時に関連付けることが難しい。
レベル2	二人称相応的役割取得（8～11歳） 他者の視点から自分の思考や行動について内省できる。 また、他者もそうすることができることを理解する。 外から見える自分と自分だけが知る現実の自分という二つが存在することを理解するようになる。
レベル3	三人称的役割取得（12～14歳） 自分と他者の視点以外、第三者の視点を取ることができるようになる。従って、自分と他者の視点や相互作用を第三者の立場から互いに調整し考慮できるようになる。
レベル4	一般化された他者としての役割取得（15～18歳） 多様な視点が存在する状況で自分自身の視点を理解する。

イ 対面的なかかわりとネット上のかかわり

他者とのかかわりを、顔と顔を突き合わせた対面的なかかわりとネット上のかかわりという視点から分類してみると、情報の伝わり方、受け止め方に差があることが分かる（資料2）。

【資料2】対面的なかかわりとネット上のかかわり

	身近な人（家族、友人、知人）の感情や思考の場合	見知らぬ人の感情や思考の場合
対面的なかかわり	言葉、表情、身振りや手振り、間、雰囲気等で推測しやすい。 過去のかかわりから推測しやすい。	言葉、表情、身振りや手振り、間、雰囲気等で推測しやすい。 ×面識がないため推測しにくい。
ネット上のかかわり	×送信された文字や画像だけで判断するしかなく、推測しにくい。 過去のかかわりから推測しやすい。	×送信された文字や画像だけで判断するしかなく、推測しにくい。 ×面識がないため推測しにくい。

注）表は筆者が作成

は利点、×は欠点

さて、セルマンの考えに基づけば、中学生は物事を客観的に見ることができる段階である。しかし、実際には、対人関係形成においては未熟な面があり、他者の気持ちをくみ取るには表情や雰囲気など言葉以外に頼るところが大きい。従って、他者の顔や表情が見えないネット上で情報を入手する場合、送信された文字や画像だけで判断するか、その他者との過去のかかわりから推測せざるを得ないため、他者の気持ちを間違って解釈してしまうおそれがある。また、情報を発信する場合においても、文字そのものの意味が直接的に伝わり、その背景にある微妙なニュアンスをうまく表現できないため、ネット上だけのかかわりにおいては、真意がなかなか伝わりにくいと言える。そこで、伝えたい内容、思いを正しく伝えようと心掛けることや、他者を不快にさせたり、不安にさせたりしないような配慮がより重要となってくる。

ウ 本研究が目指す生徒像

本研究では、セルマンが言う「役割取得能力」を支える三つの力を基に、目指す生徒像を以下に示す。

「自分と他者との違いを認識することができる生徒」

「他者の思いや考えを推測することができる生徒」

「他者への影響を考えて行動することができる生徒」

情報モラル授業の題材はネット上のかかわりに絞るが、そこから更に考えを深め、ネットを介したかかわりであっても、ネットを介さないかかわりであっても、より良い人間関係を構築するために必要なものは同じであることを認識した授業を実践していきたい。

(2) 情報モラルについての生徒及び教員の実態と考察

情報モラルについて、生徒及び教員の実態を探り、問題点を明らかにするため、所属校生徒（389人）及び所属校を含む4中学校の教員（95人）に対してアンケート調査を実践し、回答を得た（2008年7月）。

ア 情報モラルについての生徒の実態と考察

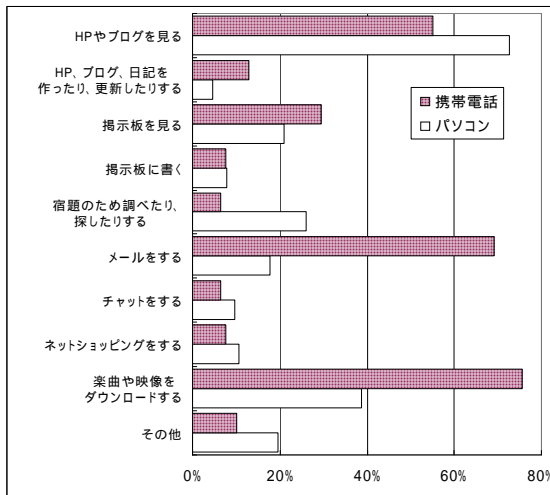
実態調査（7月）から、コンピュータや携帯電話を利用する生徒のうち、約9割の生徒がネットを利用していることが分かった。

(ア) 生徒の実態から見る情報モラルの指導内容

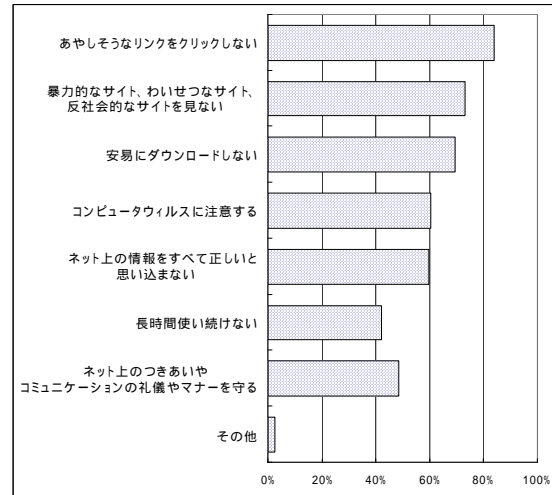
ネット利用目的において、携帯電話とコンピュータの数を合わせて多かった項目は、「ホームページ（以下、HPとする）やブログを見る」、次いで「楽曲や映像をダウンロードする」であった（資料3）。また、ネット利用時における留意点では、「あやしそうなリンクをクリックしない」、「暴力的なサイト、わいせつなサイト、反社会的なサイトを見ない」、「安易にダウンロードしない」が多かった（資料4）。つまり、情報に対して懐疑的であり、被害者にはなりたくないという思いから、注意しながらネットを活用していることが分かった。実際に、所属校では、上述のような利用目的の場合に関するトラブルは少なかった。しかし、利用目的において次に多い項目は「メールをする」であり、携帯電話によるやり

とりから人間関係上のトラブルに発展する事例が多かった。所属校における携帯電話によるメール利用率（2008年7月現在）は、1年生が41.7%、2年生が58.1%、3年生が88.6%と、学年を追うごとに多くなっている。そのような実態を踏まえ、携帯電話によるメールのやりとりを多く取り上げ、他者とのかかわりについて真剣に考える授業を実践する必要があると考えた。

【資料3】 ネット利用目的



【資料4】 ネット利用時における留意点



(イ) 他者とのかかわりにおける生徒の認識

携帯電話を含めたネット上のトラブル発生の理由を生徒はどのようにとらえているかを見ると、「名前が分からない」、「顔が見えない」というネットの特性、匿名性を挙げる声が多かった（資料5）。対面的なかかわりであれば、他者が見知らぬ人であっても、表情や雰囲気や言葉が補ってくれる。しかし、ネット上のかかわりでは、文字や画像の情報だけでしか他者の考えを知ることができず、どのような思いで情報を発信しているのか分からないこともある。たとえ、その他者が身近な人であったとしても、過去のかかわりから推測するしかなく、真意をくみ取りにくい。他者と自分のとらえ方が必ずしも同じではないということを踏まえながら情報のやりとりを行うことで、互いの違いを認識することにつなげていきたい。

次いで、「ふざけや軽い気持ち、気持ちの緩みで書き込む」が多く、ネット上では、少し羽目を外しても構わないという意識が潜在的にあると思われる。その他、「気晴らし」や「ストレス発散」として、自身の怒りや不満をぶつける目的でネットを活用しているのではないかと推測する記述もあった。情報発信が自己中心的で、他者への影響を意識していない実状がうかがえる。他者との良好なかかわりを築いていくためには、他者の気持ちを推測することが

【資料5】 ネット上のトラブル発生の理由

書き込んだ人の名前が分からない	33
顔が見えない	33
ふざけや軽い気持ち、気の緩みで書き込む	31
自分の怒りを周りの人に当てたいから、気晴らし	26
相手に対して不満がある悪口を言いたい、ストレス発散	25
書き込む人の心が弱い、思いやりがない	17
書き込めるサイトやページがあるから	11
自分の書き込んだ悪口や不満を読んでもくれる人がほしい	9
ネット上でしか気持ちを吐き出せない、相談相手がほしい	4

（回答は自由記述、数字は延べ人数）

大切であると生徒に気付かせたい。

ネット利用時における留意点では「 ネット上のつきあいやコミュニケーションの礼儀やマナーを守る」の項目が48.4%であり、ネット利用者の半数にも満たないと分かった（資料4）。このことから、(ア)で挙げたネット上の被害者にはなりたくないという意識とは裏腹に、気を付けないと自らが加害者になりうるという認識は甘いと言える。他者とのかかわりにおいてトラブルが発生するのは、このような認識の甘さにあり、他者への影響を十分に考えて行動できていないことに起因すると言える。他者とのかかわりにおいては、他者への影響を考えた上で行動する必要があると認識し、実際の行動に移すことができるように促していきたい。

イ 情報モラルについての教員の実態と考察

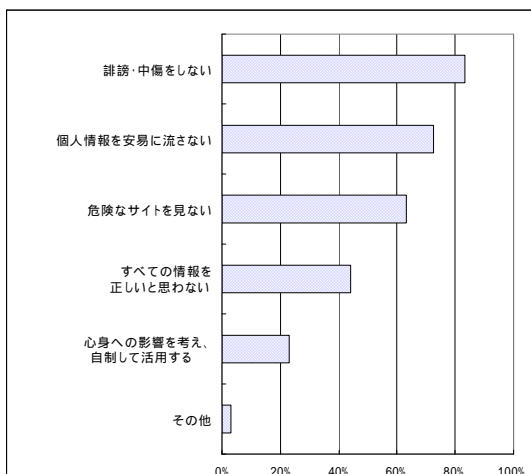
実態調査（7月）から、多くの教員が情報モラルの問題を切実な課題としてとらえ、情報モラルの指導に関心が高いことが分かった。

(ア) 教員が考える情報モラルの指導すべき内容

情報モラルの指導すべき内容において、「 誹謗・中傷をしない」の項目が最も多かった（資料6）。「直接、相手を目の前にしているわけではないので罪の意識が薄く、感情がエスカレートしていく」という回答があり、ネット上のかかわりの場合、負の感情が加速して高まっていく危険性を指摘している。授業では、他者とのかかわりを考えるとともにネットの特性を生徒に認識させたい（資料7）。

また、「他者とのコミュニケーションスキルを身に付ける指導が大事である」や「正しい使い方とともに心を育てる指導をすべきである」の回答があった。これらの回答のように、他者とのかかわり方や対人関係における道徳性を培う必要があると考えていることが分かった。このことから、他者とのより良いかかわりについて考えることが重要であるととらえた。

【資料6】情報モラルの指導すべき内容



【資料7】情報モラルへの思いや考え

- ・ ネット上のトラブルが発生するのは、直接、相手を目の前にしているわけではないので罪の意識が薄く、感情がエスカレートしていくからだと思う。
- ・ ネット上の被害に遭う事例は増加しており、緊急に指導が必要であると思う。
- ・ 情報モラルの指導では、他者とのコミュニケーションスキルを身に付ける指導が大事である。
- ・ インターネットや携帯電話の正しい使い方を指導すると共に心を育てる指導をすべきである。
- ・ 年間指導計画が作成されていないので、指導ができない。
- ・ 情報モラルの問題も大切であるが、他に優先すべきことがある。
- ・ 情報モラルの指導の必要性は感じるが、具体的な指導方法がわからないので指導できない。

(イ) 情報モラルの指導の課題

情報モラルの問題を「緊急に指導が必要」ととらえながらも、「年間指導計画が作成されていない」、「指導方法がわからない」という理由で情報モラルの指導に

取り組めない教員が多いと分かった。本研究では、指導方法や指導場面を明確にし、授業の取組計画や構想案を作成することで、これらの問題を解決していきたい。

(3) 他者とのかかわりを考える情報モラル授業取組計画の作成

他者とのかかわりを考える情報モラル授業の取組計画を作成した(資料8)。そして、目指す生徒像を基に、情報モラル授業の指導内容、実施場面、授業者を明確にした。

ア 情報モラル授業の指導内容

【資料8】他者とのかかわりを考える情報モラル授業取組計画

	1学期	2学期	3学期
	情報の信ぴょう性について考える	ネット上の誹謗・中傷について考える	携帯電話のメールについて考える
中学1年	<題材> 情報の真偽 <タイトル> 「えっ、本当？」 <ねらい> ・インターネット上では、すべての情報が正しい情報であるとは限らないと気付くことができる。 ・相手に情報を送るとき、適切な情報を発信するべきだと考えることができる。	<題材> 電子掲示板への安易な書き込み <タイトル> 「間違いを正せ！」 <ねらい> ・インターネット上のやりとりにおいて、いじめやトラブルが発生しやすい原因について考えることができる。 ・相手を傷付けないためには、どのようなことに気を付ければよいかを考えることができる。	<題材> ケータイと生活 <タイトル> 「疲れているのに！」 <ねらい> ・メールのやりとりにおいて、いじめやトラブルが発生しやすい原因について考えることができる。 ・情報を発信する際には、相手への影響を考えた上で発信するべきだと考えることができる。
	<指導場面> 道徳 4(3)公正・公平	<指導場面> 学級活動 2(2)才 望ましい人間関係の確立	<指導場面> 道徳 2(1)礼儀
中学2年	<題材> 文字だけで伝えることの難しさ <タイトル> 「正しく伝わるの？」 <ねらい> ・文字だけでは気持ちが正しく伝わらないことがあると気付くことができる。 ・情報を送るとき、相手に誤解を与えないためにどのようなことに気を付けたらよいかを考えることができる。	<題材> ネットいじめ <タイトル> 「心が痛い！」 <ねらい> ・インターネット上のやりとりにおいて、いじめやトラブルが発生しやすい原因について考えることができる。 ・相手を傷付けないためには、どのようなことに気を付ければよいかを考えることができる。	<題材> チェーンメール <タイトル> 「緊急メールがやってきた！」 <ねらい> ・メールのやりとりにおいて、いじめやトラブルが発生しやすい原因について考えることができる。 ・情報を発信する際には、相手への影響を考えた上で発信するべきだと考えることができる。
	<指導場面> 道徳 2(2)思いやりの心	<指導場面> 学級活動 2(2)才 望ましい人間関係の確立	<指導場面> 道徳 2(1)礼儀
中学3年	<題材> なりすまし <タイトル> 「こっそり使っちゃえ！」 <ねらい> ・インターネット上では、すべての情報が正しい情報であるとは限らないと気付くことができる。 ・相手に情報を送るとき、適切な情報を発信するべきだと考えることができる。	<題材> ネットいじめ <タイトル> 「チャット仲間」 <ねらい> ・インターネット上のやりとりにおいて、いじめやトラブルが発生しやすい原因について考えることができる。 ・相手を傷付けないためには、どのようなことに気を付ければよいかを考えることができる。	<題材> ケータイと生活 <タイトル> 「これが私たちのルールなのだ！」 <ねらい> ・メールのやりとりにおいて、いじめやトラブルが発生しやすい原因について考えることができる。 ・情報を発信する際には、相手への影響を考えた上で発信するべきだと考えることができる。
	<指導場面> 道徳 4(3)公正・公平	<指導場面> 学級活動 2(2)才 望ましい人間関係の確立	<指導場面> 道徳 2(1)礼儀

指導内容については、ネットの特性を理解した上で、他者の気持ちや他者への影響を配慮した情報のやりとりを考えるものとした。つまり、思いやりや配慮を持って情報を発信することの大切さを考えたり、誹謗・中傷をしたり、偽りの情報や不快な情報を発信したりしない態度を身に付けたりする授業を構想した。具体的には、新聞記事や身近で起こりうる出来事を題材とすることで、生徒が主体的に考えることができるようにした。そして、本研究が目指す三つの生徒像がどの授業でも育成できる身近な題材として携帯電話のメールを多く取り上げた。また、学期ごとのテーマを、どの学年も1学期は「情報の信ぴょう性について考える」、2学期は「ネット上の誹謗・中傷について考える」、3学期は「携帯電話のメールについて考える」とした。繰り返して指導ができるよう、次学年でも同じテーマの題材を扱うこととした。

イ 情報モラル授業の実施場面と授業者

学校生活は学級生活を中心に営まれ、学級担任やクラスメートの存在が生徒の人格形成や人間関係づくりに大きく影響を与えている。そのため、他者とのかかわりを真

剣に話し合う場として、学級が適していると思われる。併せて、現状のカリキュラムでは、他者とのかかわりの指導については主に学級活動や道徳の中で行われている。以上の理由から、授業は学級活動や道徳で実施することとした。そして、学級活動や道徳の指導内容と情報モラル授業の指導内容とを照らし合わせながら取組計画を作成した。なお、所属校における学級活動や道徳の年間指導計画を踏まえ、各学年、各学期に一度の授業とした。

授業者については、通常の学級活動や道徳を実施しており、生徒の性格、家庭環境、生育歴、生徒間の人間関係等、生徒の実態を把握している学級担任が適していると考えた。

(4) 他者とのかかわりを考える情報モラル授業の実践

ア 情報モラル授業を活性化する「分かち合いタイム」

(ア) 「分かち合いタイム」の概要

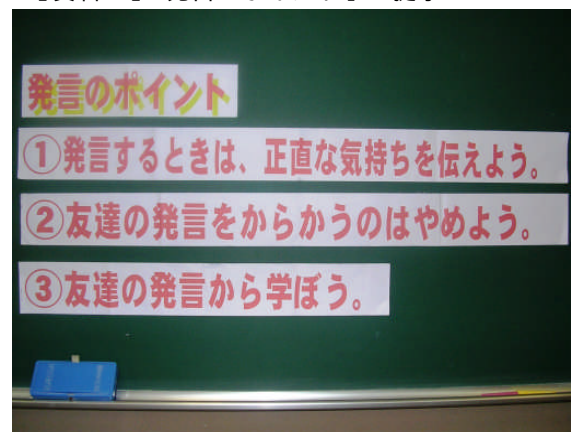
目標とする三つの生徒像に近づく手だてとして、「分かち合いタイム」という話し合いの場面をすべての情報モラル授業の中に設けた(資料9)。「分かち合いタイム」では、生徒が互いの考えを紹介し合ったり、学級全体、またはグループやペアの中で出された発言について感想を述べ合ったりした。

また、情報モラル授業のはじめに、「発言のポイント」を提示した(資料10)。発言の際には、正直な気持ちを伝えること、発言を聞くときには、他者の考えを尊重したり、他者の発言から学んだりする姿勢が大切であることを生徒に示すためである。その結果、率直な意見が出され、生徒は相手の考えに驚いたり、考えの幅を広げたりすることができた。「発言のポイント」が支えとなり、「分かち合いタイム」が充実したものとなった。

【資料9】「分かち合いタイム」の様子



【資料10】「発言のポイント」の提示



(イ) 「分かち合いタイム」の成果

生徒は「分かち合いタイム」を通して、様々なことを学んだ(資料11)。まず、「相手の思っていることと自分の思っていることが違っている」や「いろいろな意見があり、考えは一つではない」のように、他者と自分の思いや考えに違いがあることに気付いた。これは、目標とする生徒像「自分と他者との違いを認識するこ

とができる生徒」につながる姿である。

次に、「相手がどんな気持ちでしゃべっているのかを考えながら発言を聞くことができた」や「お互いに共感し合ったり、ここはこうしようと言い合ったりすることができた」と、他者の思いを推測しながら話合いを進めている姿が見られた。これは、目標とする生徒像 「他者の思いや考えを推測することができる生徒」の姿が育成されていると言ってよい。

また、「相手の考えを自分の中に取り入れることができた」や「互いの考えを教え合うことで思いつかなかった考えが浮かぶ」のように、他者の考えをしっかりと受け止めて、自分の考えを練っていくという姿が見られた。これは、目標とする生徒像 から一歩進んだ段階で、自分の考えをまとめる段階と言ってよい。

以上のように、「分かち合いタイム」によって真剣な話合いがなされ、それぞれの考えを熟成させた結果、目標とする生徒像 「自分と他者との違いを認識することができる生徒」と 「他者の思いや考えを推測することができる生徒」の姿が見られた。そして、目標とする生徒像 「他者への影響を考えて行動することができる生徒」に向かう基盤作りともなった。「分かち合いタイム」を取り入れた情報モラル授業は、生徒が他者とのより良いかわりについて真剣に考えていく上で効果的であったと思われる。「分かち合いタイム」でできた素地の上に教員の指導が加わることで、目標とする生徒像 「他者への影響を考えて行動することができる生徒」の育成につなげることができた。

【資料11】「分かち合いタイム」の振り返り

- | |
|---|
| <p><目指す生徒像 「自分と他者との違いを認識することができる生徒」が培われたと思われる振り返り></p> <ul style="list-style-type: none">・相手の思っていることと自分の思っていることが違っているのがよく分かった。・いろいろな意見があり、考えは一つではないということが分かった。・相手の考えに驚いた。・考え方の幅を広げることができた。・自分の中にはなかった考えを知ることができた。・仲の良い友だちでも、考えることは違うということが分かった。 <p><目指す生徒像 「他者の思いや考えを推測することができる生徒」が培われたと思われる振り返り></p> <ul style="list-style-type: none">・相手がどんな気持ちでしゃべっているのか考えながら聞くことができた。・相手の意見をしっかりと受け止めて聞くことができた。・お互いに共感し合ったり、ここはこうしようと言い合ったりすることができた。・普段なかなか発言できない人も同じ意見があると自信を持って発言できるのではないかと思う。 <p><目指す生徒像 の段階を経て、自分の考えをまとめる段階に進んだと思われる振り返り></p> <ul style="list-style-type: none">・相手の考えを自分の中に取り入れることができた。・自分の考えをまとめることができるよい時間である。・互いの考えを教え合うことで思いつかなかった考えが浮かぶ。 |
|---|

イ 情報モラル授業の実践

情報モラル授業は、所属中学校2年生を対象に3回実践した。これは、生徒の多くが2年生の後半になると、個人専用の携帯電話を所有し始めたり、HPやブログ上でのやりとりが盛んになったりするという所属校の実態があったからである。

(7) 第1回情報モラル授業(7月)

「正しく伝わるの?」と題して授業を実践した(資料12)。文字だけでは気持ちが正しく伝わらないことがあることを認識すること、相手に誤解を与えないために

はどのようなことに気を付けて情報を発信したらよいのかを考えることをねらいとした。「メールは表情が見えないので、不安になったり、しっかり伝わらなかったりして不便な面がある」や「メールは、言葉のトーンがないのでとても伝わりにくいと思った」という発言にみられるように、生徒はメールの特性をとらえ、自分自身の生活に当てはめて考えを巡らした。また、「感情が伝わりにくいので紛らわしい言葉を使わない方がよい」と日常生活に生かそうとする感想があった。授業のまとめでは、情報が他者へ正確に伝わるように発信すべきであると指導した。

(イ) 第2回情報モラル授業(9月)

「心が痛い!」と題して授業を実践した(資料13)。ネット上のやりとりでは、なぜ、いじめやトラブルが発生しやすいのか、また、相手を傷付けないためにどのようなことに気を付けなければならないのかを考えることをねらいとした。資料は、ネットいじめに遭い自殺をした女子生徒に関する新聞記事を使用した。「攻撃する人たちも、心の中に直接言えないストレスのようなものを抱えている」と加害者の内面に注目した発言があった。また、「メールで何かを伝えるときには、伝える内容について十分に考えてから伝えるようにしたい」とメッセージを送信する際の配慮すべき点を述べる感想もあった。授業のまとめでは、どのようなことがあっても、他者を誹謗・中傷するようなことを書き込んでではないと指導した。

(ウ) 第3回情報モラル授業(11月)

「緊急メールがやってきた!」と題して、授業を実践した。メールのやりとりでは、なぜ、いじめやトラブルが発生しやすいのかを考えること、情報を発信する際には、相手への影響を考えた上で、発信すべきだと認識することをねらいとした。

【資料12】第1回情報モラル授業構想案

第2学年 情報モラル授業構想案①	
【タイトル】	「正しく伝わるの?」
【目標】	・文字だけでは気持ちが正しく伝わらないことがあると気付くことができる。 ・相手の発言をからかうのはやめよう。 ・発言するとき、相手に誤解を与えないためにどのようなことに気を付けたいかを考えることができる。
【指導場面】	道徳
【授業の流れ】	(2)思いやりの心
生徒の活動及び教師の発問(・予想される生徒の反応)	
○導入(10分)	1 発言のポイントを確認する。 ①発言するとき、正直な気持ちを伝えよう。 ②自分たちの発言をからかうのはやめよう。 ③友だちの発言から学ぼう。 2 二人組になり、一方が他方を誘うロールプレイをする。 (1)「相手を映画やショッピングに誘おう。」 ＜1回目は顔を見ながら相手を誘う。2回目は顔を隠しながら相手を誘う。＞ (2)2回の活動を比較して、感じたことを紹介し合おう。 (3)話し合われたことを発表する。
○展開(25分)	3 「資料を読んで考えよう。」 夜、宿題をやっているカズキのもとにユミコから携帯電話へメールが届いた。「明日、当番だから早く学校に来てよ。7時30分でもいい?」というメールであった。それに対し、「当番?いいよ」とカズキは返事を送った。翌朝、7時30分前に学校に着いたユミコはカズキを待たず。しかし、カズキが登校したのは7時50分過ぎだった。怒ったユミコはカズキに詰め寄ったが、「当番なんて適当でいいよって返事したじゃん!」とカズキは答えた。 4 「メールのやりとりをしているときのユミコとカズキの気持ちを考えてみよう。」 (ユミコの気持ち) ・明日は当番だからしっかり仕事をやるよ。 ・カズキにも早く来てもらって気持ちよく仕事をしよう。 (カズキの気持ち) ・カズキが直ちにメールを返してくれてうれしい。 ・当番なんていい加減にやればいいのに、ユミコはまじめだな。 ・早く登校するなんて面倒くさい。 ・わざわざメールを送ってくるようなことでもないのに。 5 「カズキはどうすれば誤解を招かなかったのだろう。」 ◆◆◆ 「分かち合いタイム」 ◆◆◆ ・「適当でいいよ、いつもと同じ時間に行こうよ。」などの言葉をもっと少し足せばよかった。 ・打ったメールを読み直して、相手にしっかり伝わるように打ち直せばよかった。 ・メールでなくて電話で直接話せばよかった。
○まとめ(15分)	6 授業を振り返り、考えたことや感想をワークシートに書く。 7 書いたことを発表する。 8 教師の説話を聞く。メールを送るときや相手へメモを書いて渡すときに気を付けていることを話す。

【資料13】第2回情報モラル授業の風景



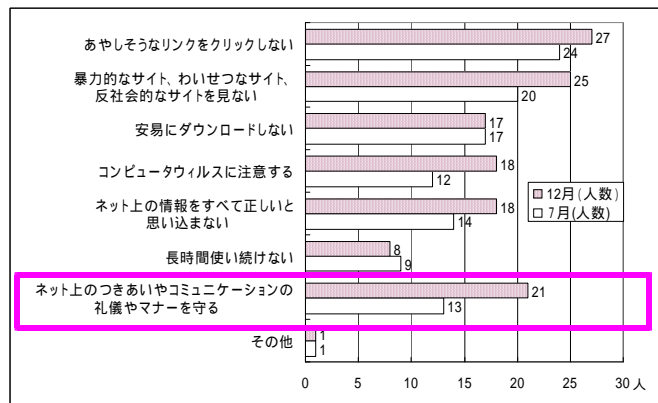
「メールには、偽の情報が含まれることもあると気付いた」と自らの警戒心を呼び起こすような発言があった。また、「送信されたメールにすぐに反応して送信すると、送信された相手も迷ってしまうのでよく考えてから行動に移したい」と他者への配慮を考えようとする感想があった。授業のまとめでは、チェーンメールのもらさず悪影響を話し、チェーンメールは転送すべきではないと指導した。

(5) 生徒及び教員の意識の変容

ア 学級全体から見る生徒の意識の変容

3回の情報モラル授業を実践した2年A組の生徒(35人)を対象として、再度、実態調査を行った(2008年12月)。実態調査(7月)と実態調査(12月)との結果を比較してみると、「生徒のネット利用時における留意点」では、留意点を意識する人数の増加が全体的に見られた(資料14)。中でも「ネット

【資料14】ネット利用時における留意点(2年A組)



上のつきあいやコミュニケーションの礼儀やマナーを守る」は、他のどの項目よりも伸びが大きかった。学級全体として、ネット上における他者とのかかわりについての意識が向上し、情報モラル授業を実践したことの効果があったことは明らかである。

イ 生徒個々から見る意識の変容

実態調査(12月)から、3回の情報モラル授業を経て、生徒の意識や行動がどのように変容したのかを見ることができた(資料15)。

【資料15】他者とのかかわりにおける意識や行動の変容

ネット上のかかわりにおける意識や行動の変容

- ・メールは便利だけれど、相手の本音が分からないこともあると気付いた。
- ・メールをするときに相手の気持ちを考えるようになった。
- ・冗談で言った発言でも、メールだとそれが伝わらないことがあると気付いた。
- ・言葉で言われるより書かれた文字を見る方が意味が重くなり、予想以上に相手を傷付けてしまうと考えようになった。
- ・メールで文字を打った後、見直しをするようになった。
- ・メールする内容がはっきりと伝わるように詳しく打つようになった。
- ・ネット上で攻撃されたり、チェーンメールが転送されたりしたら、誰かに相談できるようにしたい。また、誰かが困っていたら相談に乗ってあげたいと考えようになった。
- ・パソコンやケータイを使わずに、相手に直接伝えることも大切だと考えるようになった。

対面的なかかわりにおける意識や行動の変容

- ・自分のことしか考えていなかったけれど、他の人が考えていることを気にかけるようになった。
- ・ネット上のかかわりについて真剣に話し合うのは初めてだった。クラスみんなが深く考えていたことが私にはすごく嬉しいことだった。A組でよかったと素直に思う。これからの生活で、周りの人がどんなことを考えているか知っていききたい。
- ・ふと出た言葉がその人を深く傷つけていないかを少し考えるようになった。
- ・相手に言う前に使う言葉を考えるようになった。
- ・相手の気持ちを考えて発言するようになり、言葉遣いが優しくなった。
- ・誤解されないような言葉遣いを心掛けるようになった。
- ・相手の顔を見ながら話をするようになった。

(7) 目指す生徒像 「自分と他者との違いを認識することができる生徒」について

生徒は、「メールは便利だけど、相手の本音が分からないこともある」のように、ネット上では、他者の思いや考えを正確にとらえることは難しいと気付いた。そのため、「自分のことしか考えていなかったけれど、他の人が思っていることを気にかけるようになった」など、他者の思いや考えに関心を抱くようになった。「ネット上のかかわりについて真剣に話し合うのは初めてだった。クラスみんなが深く考えていたことが私にはすごく嬉しいことだった」のように、クラスへの愛着とともに、他者の思いや考えを知った喜びを伝える生徒もいた。他者とのかかわりにおいて、相手の思いや考えを正しく知ることで互いの違いを認識することができた。

(イ) 目指す生徒像 「他者の思いや考えを推測することができる生徒」について

生徒は、「メールをするときに相手の気持ちを考えるようになった」と他者の気持ちを考えることの大切さに気付いた。また、「冗談で言った発言でも、メールだとそれが伝わらないことがある」や「言われるより書かれた文字を見る方が意味が重くなり、予想以上に相手を傷付けてしまう」のように、ネット上でのやりとりの難しさから相手への情報発信を慎重に行おうと考えたり、「ふと出た言葉がその人を深く傷付けていないかを考えるようになった」や「使う言葉を考えるようになった」と普段の会話の在り方を考え直したりする生徒もいた。具体的に生徒Sの変容を見ると、どんなことがあっても、ネットいじめはしてはならないとしっかりと認識できるようになり、他者の感情や思考を推測できるようになったことがうかがえた(資料16)。

【資料16】生徒Sの意識の変容

第2回情報モラル授業(9月)	最終調査(12月)
「ネットいじめに遭う方にも問題がある。」	「どんなことがあろうとも、相手の嫌がることを書いてはならないと考えようになった。」

(ウ) 目指す生徒像 「他者への影響を考えて行動することができる生徒」について

生徒は、「メールで文字を打った後、見直しをするようになった」や「メールする内容がはっきりと伝わるように詳しく打つようになった」と自らのメール発信を改善した。また、「相手の顔を見ながら話をする」や「誤解されないような言葉遣いを心掛ける」など、普段のコミュニケーションや会話の在り方を改善する生徒もいた。具体的に生徒Tの変容を見ると、他者への影響を考えた上でチェーンメールは転送しないという行動が表れ、他者への影響を考えた上での行動へと実践化している姿が見られた(資料17)。

【資料17】生徒Tの意識・行動の変容

第3回情報モラル授業(11月)	最終調査(12月)
「チェーンメールが来てたら念のために転送する。」	「チェーンメールを転送したら誰かが嫌な思いをしないか考えた上で、送信しないようになった。」

ウ 教員の意識の変容

授業を参観した教員の意識も変わってきた。「生徒が情報モラルを身近な問題としてとらえていた」や「情報モラル授業を通して心の在り方を学び、学級の仲間意識が高まった」と生徒の変容を素直に喜び、授業の成果を語る教員がいた。また、「文字について考え、普段の会話やコミュニケーションに目を向けながら、他者とのかかわりについて真剣に話し合うことができた」や「話し合いを充実させることで、教師の指導が一方的でなくなり、子どもたちの心にしみ込んでいくことが分かった」と、「分かち合いタイム」の効果を実感した教員もいた。また、「生徒がこんなにも深く考えることができるなら、このような授業を自分も実践してみたい」と情報モラル授業の実践に意欲を燃やす教員がいた。

5 研究のまとめ

(1) 研究の成果

ア 実態調査から、生徒の情報モラルに対する認識の甘さや、そこに潜む危険性、教員の情報モラルの指導に対する思いを知ることができた。そして、情報モラル授業の必要性を認識することができた。

イ 他者とのかかわりを考える情報モラル授業を九つ構想した。構想案を基に、所属校2年生を対象に授業を実践することができた。

ウ 「分かち合いタイム」を情報モラル授業に取り入れたことで、生徒が学級の仲間と真剣に話し合い、情報モラルの指導を受け入れる素地ができた。

エ 情報モラル授業を通じて、生徒は、ネット上における他者とのかかわりについて真剣に考えることができた。そして、相手の気持ちや考え、置かれている状況や立場を推測した上で情報発信することの大切さを学んだ。また、学んだことを、対面的なかかわりにも適用させ、よりよい人間関係を構築しようとする姿が見られた。

(2) 今後の課題

ア 本研究では、所属校の実態により、2年生を対象に授業を実践した。1、3年生においても本研究で作成した構想案を基に授業を実践し、2年生同様、情報モラル授業の有効性を考察していきたい。また、学校全体で計画的に授業に取り組むことで、教員全体の意識向上も図ることができると期待する。

イ 本研究では、他者とのかかわりという視点から、情報モラルを守る基盤作りを試みた。しかし、一方で、安全教育の側面を無視してはならない。ネット上、被害に遭わないための安全意識やスキルを向上させる安全教育をどのように指導していけば効果的であるのかを明確にしていきたい。

ウ 本研究では、生徒が授業を通じて、情報モラルについて考える実践を試みた。しかし、学校の中だけでなく、家庭や地域との連携を図る中で、情報モラルに関する指導を行う必要もあると思われる。家庭や地域へどのようなアプローチをしたらよいか考えていきたい。

参考文献

- ・朝日新聞西部本社編著『11歳の衝動』, 雲母書房, 2005年.
- ・著作権情報センター『はじめての著作権講座』, 2008年.
- ・著作権情報センター『はじめての著作権講座』, 2008年.
- ・藤川大祐著『ケータイ世界の子どもたち』, 講談社, 2008年.
- ・平木典子編集『現代のエスプリ アサーション・トレーニング その現代的意味』, 至文堂, 2005年.
- ・堀田龍也著『メディアとのつきあい方学習』, 株式会社ジャストシステム, 2004年.
- ・堀田龍也編著『事例で学ぶNetモラル』, 三省堂, 2006年.
- ・時事通信出版局『これからの授業に役立つ新学習指導要領ハンドブック』, 2008年.
- ・國分康孝監修『エンカウンターで学級が変わる 中学校編』, 図書文化, 1996年.
- ・國分康孝監修『エンカウンターで学級が変わる Part2 中学校編』, 図書文化, 1996年.
- ・國分康孝・片野智治著『構成的グループエンカウンターの原理と進め方』, 誠信書房, 2001年.
- ・國分康孝・國分久子監修『構成的グループエンカウンター事典』, 図書文化, 2004年.
- ・中村祐治編著『日常の授業で学ぶ情報モラル』, 教育出版, 2007年.
- ・日本教育工学会『「情報モラル」指導実践キックオフガイド』, 2007年.
- ・日本教育工学会『緊急課題に対応した情報モラル教育セミナー』資料, 2008年.
- ・宮田仁監修・編集『情報モラル - ユビキタス社会のマナー & ネチケット - 』, 一橋出版株式会社, 2005年.
- ・ロバート・L. セルマン著, 大西文行訳『ペア・セラピー どうしたらよい友だち関係がつかれるか』, 北大路書房, 1996年.
- ・渋井哲也著『学校裏サイト～進化するネットいじめ～』, 晋遊舎, 2008年.
- ・下田博次著『学校裏サイト』, 東洋経済新報社, 2008年.
- ・渡辺弥生編集『V L Fによる思いやり育成プログラム』, 図書文化社, 2001年.
- ・山崎英則・加藤幸夫共著『心の教育の本質を学ぶ - 人間のこれからの生き方を求めて - 』, 学術図書出版社, 2005年.
- ・大和淳著『学校教育と著作権』, 著作権情報センター, 2008年.
- ・安川雅史著『「学校裏サイト」からわが子を守る!』, 中経出版, 2008年.
- ・文部省『中学校学習指導要領解説 道徳編』, 大蔵省印刷局, 1999年.
- ・文部省『中学校学習指導要領解説 特別活動編』, 東洋館出版社, 1999年.
- ・静岡県中学校道徳副読本『心ゆたかに』, 静岡教育出版社, 2008年.
- ・静岡県教育委員会『情報モラル・セキュリティ学習指導案集』, 2007年.
- ・視察研修資料 岡山県総合教育センター(2008年),
岡山県立倉敷天城中学校(2008年),
沼津市教育委員会(2008年).

望ましい「在り方」で情報社会を生き抜く生徒の育成

－ SGE（構成的グループエンカウンター）を取り入れた情報モラル指導 －

情報教育研修課 長期研修員 宇田 信一

1 主題設定の理由

社会の情報化はますます進展し、誰でも、情報を受信・発信することが容易にできるようになった。しかし、子どもたちの世界に目を向けると、携帯電話やインターネットを利用する際、人間関係上のトラブルを引き起こしたり、犯罪に関与したりする姿がある。そのようなにならないまでも、規則的な生活リズムを保持できずに心身が病んでしまったり、学力や体力の伸長に支障を来したりと、なかなか現状は好ましいものではない。また、「学校裏サイト」、「プロフ」の存在などは深刻な社会問題となっている。多くの教育関係者、保護者はこれらの問題を早急に解決しなければならないと感じている。事実、所属校においても、携帯電話やインターネットを介してのトラブルが後を絶たない。そのような中、中学校の新学習指導要領では、「各教科等の指導に当たっては、生徒が情報モラルを身に付け」る必要性をうたっている。また、静岡県策定の「人づくり『2010プラン』」では、学校現場において、生徒「一人一人が情報とどう向き合っていくかということに対する自覚を促し、情報を扱う上でのモラルや責任感を育てること」の必要性を述べている。

さて、所属校における情報教育の実践を振り返ってみると、「情報活用の実践力」育成、「情報の科学的な理解」伸長は各教科等で横断的になされている。しかし、「情報社会に参画する態度」の育成という点では、何か問題が起こってから指導するという対処療法的な指導が行われているだけである。それは、教員一人一人が指導の必要性を感じていても、年間計画の中に指導場面が位置づけられておらず、指導内容についても具体的に示されていないためであると考えられる。そこで、まずは、現状のカリキュラムの中で、無理のない時間設定を行い、しかも、単発の指導ではない指導体系を構築しようと考えた。また、情報手段活用時に発生するモラルの問題が、人間関係づくりの未熟さ・希薄化に大きく関係があると考え、よりよい人間関係づくりを意識した授業を試みようと考えた。特に、情報社会における正しい判断や望ましい態度を育てるために、自己理解、他者理解、よりよい人間関係づくりを目指すSGEの手法が効果的であると考えた。SGEは、秩序ある状況下で自己開示を行う。本音と本音で語り合い、相手を理解し、自己を振り返る。そして、望ましい自己変容を遂げていくものである。まさに、隠れたところで行われる問題行動（ネット上の悪意ある書き込みやなりすまし等）とは相対する活動である。心を開き合った中で作られる人間関係は、相手との関係をよりよいものにしていこうとする態度を育成し、ひいては、情報社会を生きる一員として健全な社会を作り出していこうとする態度に繋がっていくものとして有用性があると考えた。

研究に先立っては、情報モラルに関する生徒、教員の実態把握を行い、国や県の調査と比較することから始めたい。

2 研究の目的

中学校3年間における情報モラル指導体系の作成、S G Eの手法を取り入れた授業実践を通し、その有用性を検証する。

3 研究の方法

(1) 情報モラルについて、生徒、教員の実態調査を行い、問題点を明らかにする

(2) より効果的な指導とするための手だての工夫

ア 情報モラルにおいて、中学校3年間の指導項目を発達段階に応じて分類し、体系化する

イ 授業においてS G Eの手法を取り入れる

(3) 生徒、教員の意識の変容をとらえ、今後の課題を見いだす

コミュニティサイトを用いた効果的な校内研修の在り方
－校内LANとインターネットの効果的な併用の方法を考える－

情報教育研修課 長期研修員 大村 隆宏

1 主題設定の理由

教育公務員特例法の第21条に、「教育公務員は、その職責を遂行するために、絶えず研究と修養に努めなければならない。」とある。校内研修は、もともと現場に近い位置で、職務を継続しながら行われるという点で、大変重要な意味を持っていると考える。

これまで、研修の時間には、互いの活動の報告や教材観・学力観についての学び合い、生徒の様子など、様々な情報・知識が交換され、共有されていた。

しかしながら、空き時間が合わなかったり、放課後にも集まることができなかったり、時間的な制約を受けることが見受けられた。各教員の生活もあるので、勤務時間終了後まで残って研修部会や教科部会を開くことにも限界があった。また、中学校では、教科担当が一人の教科では、教科部会自体が成り立たない場合もありうる。

日々の活動の中では、お互いの授業を参観する機会も少なく、授業研究などを撮影しても、その後ビデオテープを見る余裕はなかなか作り出せないのが現実である。

そこで、研修の効果をより高める手段の一つとして、校内 LAN とインターネットを併用したコミュニティサイトを用いた校内研修を考えた。

授業前であれば、教材や指導案をインターネット上の共有フォルダに入れる。それに対し、参加者が授業の空き時間などを利用して検討し、意見を書き込む。直接顔を合わせて議論をする必要がなくても、絞り込まれた話題についてのみ話し合いをもてるので、時間の有効な活用にもつながるだろう。校内だけでなく、地区の教科研究部員や教育事務所、大学などの研究者に参加をお願いすることで、より多くの指導を受けることが可能となる。

校内 LAN の活用法としては、自分の行った授業をビデオ映像ファイルにして保存しておき、授業の振り返りを行うときに役立てることが考えられる。授業案集、研究発表なども、デジタルデータも添付して収集することで、後の研修にも有用となるだろうと考える。

2 研究の目的

インターネットと校内 LAN の双方にコミュニティサイトを作成し、校内研修や、教職員相互の情報交換・情報共有の場としての有効性を検証する。

3 研究の方法

(1) 現在の校内研修について、問題点を明らかにする

(2) より活発な研修を行うための手だての工夫

ア コミュニティサイトの作成

イ 協力者について、どのような個人・組織・団体をお願いするか検討する

ウ コミュニティサイトでの意見交換がより活発になるようにはたらきかける

(3) 教科の研修の状況の変化を把握し、今後の課題を見いだす